

スピーチ講座第5回 マイクを使いこなすための基礎知識

NADE九州支部事務局長・アナウンサー 加地 良光

ディベート甲子園、決勝戦の舞台の東洋大学井上円了ホール。静かに議論に耳を傾ける満員の観衆に、ディベートをする声が響き、心地よいリズムを生み出します。

私は、司会として、ディベートが粛々と進行するように、簡潔かつ低いトーンで、ひとつひとつの言葉を丁寧にマイクにのせるようにと考えています。

ところで、ディベーターの様子をステージで見ている、いつも気になるのがマイクロフォンの使い方です。

今回は、マイクロフォンの基礎知識と、使い方についてまとめます。

● マイクロフォンを知る

マイクロフォンに始まり、マイクロフォンに終わる、これが『音声』の世界です。自分の出す音の命は、マイクロフォンが握っていると言っても過言ではありません。

アナウンサーの世界でも、言葉を使って視聴者に伝える入り口が、マイクロフォンです。

マイクロフォンには 100 ほどの種類があるといわれていて、それぞれに特徴があります。

音声のスタッフが、放送現場の状況や映像などから総合的に判断して、どのようなマイクロフォンを使うのかを選択しています。

○ マイクロフォンの指向性について

意外に知られていないのが、マイクロフォンの指向性です。つまり、マイクロフォンの方向による「感度の差」があるということです。主な種類は次の通りで、特徴を押さえておきましょう。

・ 無志向性

方向よっての感度の差があまりなく、周りの音を広く拾います。インタビューの時でも方向を意識せずにでき、静かな場所では二人の真ん中にこの種類のマイクロフォンを置いても大丈夫です。逆に騒がしい場所では、いろいろな音を拾ってしまうので、インタビューなどの声を明瞭に拾えず、不向きといえます。マイクロフォンのタイプでは、一部のハンドマイクや主なピンマイクがこれにあたります。

・ 単一指向性

一つの方向に感度が強いもので、不必要な音（雑音）はほとんど拾いません。正確に言えば、マイクロフォンを向けた方法まっすぐの音のみを拾い上げてきます。

この主のマイクロフォンでインタビューをするときは、話す人に対してのマイクロフォンの方向がきちんと口の方向に向いているか、近すぎないかなどインタビューアーが合わせる必要があります。

場内放送が出ているような騒がしい場所や、スポーツ中継のような場所に適しています。

マイクロフォンのタイプとしては、一部のハンドマイクや、接話マイクなどがあります。

○ マイクロフォンの種類について

マイクロフォンは手で握るおなじみのマイクロフォンしかイメージしにくいかもしれませんが、いくつか典型的なマイクロフォンの種類を取り上げます。

・ ピンマイク

映像としてマイクが小さいため目立たない丸いマイクロフォンで、胸のあたりにピンで止めます。コードが見えないように、洋服の内側を通しておきます。

マイクロフォンの頭には、風除けのために、キャップをかぶせるようになっていて、洋服の色に合わせてられるようにカラフルなものが用意されています。

ちなみに、マイクロフォンをつける位置は、相手と話す可能性があるときは、その相手の側に顔が向いても音を拾うようにと、胸のつける位置も左右考えて付けたりしています。

・ スイッチ付マイクロフォン

ハンドマイクにスイッチを付けたもので、必ずスイッチの ON/OFF を確認しないといけません。

スイッチがマイクロフォンの側面に付いているものと、柄の下側に凹み部分に付いているものがあります。

いろんな式典などでもマイクのスイッチ OFF のまま喋ろうとして失敗するのをよく見かけま

す。

マイクをOFFにしておかないといけないという気持ちが働くものです。さりげない確認が必要です。

ただ、ホールのステージなどでは、マイクロフォンのON/OFFは、会場の音声担当のスタッフがしてくれることが多いので、スイッチが付いていないマイクロフォンが多いと思います。付いていないマイクロフォンのスイッチを探す動作も避けたいものです。

・ 接話マイク

スポーツ中継などでよく見かけるヘッドホンからマイクロフォンが口のところに出てきているものです。

きちんと固定されているために、指向性を外すことが少なく、また両手を自由に使えるのが特徴です。

放送現場のスタッフ、カメラマンやアシスタントディレクターなどの連絡用にも使用されます。

・ 卓上マイク

主にスタジオで使用しますが、スタンドのほかに、盤状になった置きマイクもあります。

・ ほか

昨年ミュージカルの出演をしましたが、舞台の世界でもマイクロフォンの使い方にはいろんな工夫がありました。コードを衣装の中を這わせて、額や頬にマイクロフォンをつけます。プロの方は、かつらの下を通してマイクロフォンをつける場合もあるそうです。

大変感度が良い精密なものを使うために、汗などの湿気に弱く、途中でマイクロフォンが効かなくなってしまうこともあるそうです。

そのために、舞台にはいろんなところにマイクロフォンを隠して設置しています。

私の出演したミュージカルは、予算の限られた舞台だったので、全員分の携帯マイクロフォンがありませんでした。

ステージ前面に仕込まれているいくつかの盤状のマイクロフォンの位置を確認しながら、セリフはさりげなく、その場所に近づいて言うといいと、演出家がアドバイスをしていたのが印象的でした。

○ マイクロフォンの使い方について

・ デリケートさに注意を

マイクロフォンが機能しているかどうかを確認するために、マイクロフォンを吹いたり、叩い

たりする人をよく見かけます。これはNGです。マイクロフォンは、衝撃に弱く、丁寧に扱うことが大事です。

ハンドマイクとして使用が終わった後、スタンドにつけるか、あるいは、テーブル上に用意されてスポンジなどの上にマイクを置きましょう。

・ マイクロフォンとの距離

一般的に10から15センチくらいが適当です。まわりの音や、マイクロフォンの指向性によっても変わってきます。

質疑応答で、ハンドマイクを使用するとき、口元にピッタリと付けながら、大声で話す人がときどきいます。それぞれのマイクロフォンの音量を調整できるときはまだよいのですが、いろんなマイクを一定音量で調整している場合は、うるさくなってしまいます。

地声の大きさに自信がある人は、少しマイクロフォンを離れた方がよいでしょう。

・ マイクロフォンの向き

マイクロフォンには指向性があるということを丁寧に説明してきました。

まず、マイクロフォンの向きを口に真っ直ぐ向けることが基本です。

ディバートのスピーチでは、マイクスタンドでの卓上マイクを使用する人が多いでしょう。

スピーチを始める前に、必ず、マイクロフォンの高さや向きを、自分のスピーチする体勢に合わせておくことが必要です。

スピーチは原稿に目を走らせると、うつむき気味になります。マイクロフォンを顔の正面に水平気味にすると、指向性はずすことになり、顔の少し下からあごに合わせるぐらいしておくとうまいでしょう。

位置が気になるようであれば、スタンドからはずして、ハンドマイクとして使用した方が、動きを制約されずに、自由に話せます。

○ マイクロフォンの力を最大限利用する

イベントのMCなどでアナウンサーの声がよく通りますねといわれます。

しかし、今のマイクロフォンは、性能が高く、指向性などを考えながら使えば、あまり声を張り上げなくても、良い声にしてくれます。

優しく声をマイクロフォンにのせる、あずける気持ちが大切です。